馬毛島埋葬址

--- 鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡 ---

1980

西之表市教育委員会

はじめに

西之表市長 井 元 正 流

種子島が日本文化の中で、中国あるいは南方文化の伝播を考えるうえでの要衝であった ことは、数多くの遺跡や記録等で明らかであります。

一方, 馬毛島は, 昭和26年入植者が定住するまでは種子島と目と鼻の先にありながら, たとえ人々が住んでいなかったにもせよ, その記録なり資料は極めて乏しいものがあります。

記録としては、、17世紀頃からのもので難破船のこと、馬毛鹿のこと、1808年に蘇鉄を植えたこと、明治になって緬羊や牛の牧場経営が試みられたり、三ケ浦に漁業根拠地を払い下げたことが見える程度であります。

しかし、冒頭でも述べましたように馬毛島にも種子島同様の人文の跡があってよいし、 又ない筈はないと思います。それは、ひとつの謎でもありますが、又それを明らかにする ことは私達の希望でもあります。

この度、初見氏の地質調査をきっかけに、白木原教授等の手によって馬毛島初の椎ノ木遺跡が発掘され、秘められた歴史の一部を垣間みることが出来、又今後馬毛島、種子島を考えるうえで指標を与えられたことは大きな喜びであります。

ここに、発掘調査の概要をこの小冊子にまとめ諸賢研究の資に供します。これにより、 今後の研究が益々発展することを祈って止みません。終りに、両先生はじめ本冊子発行の 為御執筆下さいました諸先生方に深甚の謝意を表します。

目 次

発掘調査の経過と組織(鮫島安豊)1 頁
馬毛島の地形・地質(初見祐一)
遺跡の位置と環境(中村 愿)8 頁
遺跡の発掘状況(″)11頁
層 序 (//)13頁
人骨と土城(")15頁
出土遺物 (木下尚子)16頁
椎ノ木遺跡出土人骨について(中橋孝博、永井昌文)24頁
おわりに(白木原和美)34頁

発掘調査の経過と組織

発掘調査の経過

昭和52年夏,市文化財保護審議委員と馬毛島文化財調査に出かけた際,種子島・屋久島・馬毛島の地質調査に訪島していた東京都立大学院生初見祐一氏に逢ったのが,この椎ノ木遺跡発見の契機となった。(初見氏は,現在,埼玉県立朝霞高校教諭)

初見氏は2ヶ年の長期にわたり調査される中で、馬毛島西海岸砂丘中に貝殻や骨片を含む層を発見し市教委へ電話で連絡された。市教委では、種子島周辺の砂丘でこれまで発見されている弥生時代の埋葬址ではないかと推定し、昭和53年9月市文化財審議委員と再度調査した。砂丘断面に、上顎骨が露出しており、弥生後期の土器片が包含層中に発見された。その後、偶々種子島の遺跡見学に来島していた熊本大学白木原教授に馬毛島へ渡ってもらい、遺跡の確認、遺跡の広がりを調査していただき、その結果、貴重な埋葬址と判断し発掘調査をするにいたった次第である。

尚、参考までに馬毛島でこれまで発見されたものとして「文化年中、馬毛島で開墾中出土せし唐焼なり」と墨書のある南宋時代竜泉窯の青磁椀(西之表市 吉留金徳氏より市博物館へ寄贈されたもので市文化財に指定している)が発見されている。これはかって宋船が馬毛島で遭難した際、死体に副葬されたものと考えられるが、平安時代中期の日宋交通更には、種子島の歴史を解く一つの鍵として重要なものである。しかしこれらの出土場所は不明である。

発掘調査の組織

発掘調査の主体

市教育委員会

発掘調査団長

市教育長 小 原 季 丸

総務

庶務

同 社会教育課長 山 内 孝 男

(新)三

同 社会教育係長 兼文化係長 鎌田和好

浦安

徳

(旧)羽島友行

熊谷智徳

同 文化係主査

市教委 総務課長

同主事

鮫 島 安 豊 奥 村 学

発掘調査指導者

熊本大学文学部教授

白木原 和 美

同 担当者 発掘調査員並びに 同 助教授

甲元真之中橋孝博

調査参加者

九州大学医学部助手 九州大学大学院生

木下尚子

熊本大学文学部助手

中村愿宮本千絵

同 学生 宮 本 千 小 畑 弘

奄美考古学会

小 畑 弘 己 中 山 清 美

市文化財審議委員

上妻紀夫

本文執筆者 白木原和美,永井昌文,初見祐一,中村 愿,木下尚子,中橋孝博,鮫島安豊

馬毛島の地形・地質

1. 概 要

西之表市の真西約12kmの海上に、南北約4.5km、東西約3kmの小島、馬毛島がうかぶ。上空から見おろした島の輪郭は、北に尖った三角形に似た形をしている。西之表市からは、中央部に最高点海抜71.1mの岳ノ越(たけのこし)を突き出し、両翼に海岸段丘面の低平なスカイラインを連ねた特徴的な姿を眺望することができる(図版I)。

馬毛島は,種子島,屋久島と共に一80m以浅の海底の平担面上に位置し,大隅半島とは -120~100mの陸棚でつながっている。屋久島西岸からは比高 600 m を超す急斜面が海底にのび,西方の火山帯に続いている(第1図)。これらの海底地形と同様に



馬毛島西方の、北東一南西に走る海底の急斜面の存在も、付近の地殻変動の様子と密接な関係があると考えられる。

外弧隆起帯(貝塚, 1973)に属するこれらの島々のうち、種子島は、古第三系と考え 1) られている熊毛層群を基盤としているが、馬毛島の基盤も熊毛層群とほぼ同じ岩相を している。熊毛層群を構成する岩石は主に硬頁岩、粗粒砂岩で、激しく褶曲し、多く の正逆の断層に断たれている。馬毛島の基盤をなす地層の一般的走向は北東一南西と なっている。

馬毛島の低平さは海岸段丘に因っている。島に発達する海岸段丘は2段に大別できる。高位の段丘面の分布高度は海抜45~15mで、低位の段丘面は、全島を縁どるように海抜数m以下に分布する。

付近の海岸段丘の形成時代は、段丘面の分布高度、開析状態、段丘構成層の吟味などや段丘面にのるテフラによって推定、対比されている(中田、1968; 町田、1969; 成瀬、1974など)。高位の段丘は洪積世の末期に、低位の段丘は完新世に、それぞれ形成されたと考えられる。本稿では洪積世段丘、完新世段丘と呼ぶことにする。洪積世段丘の形成期に、岳ノ越だけを海上に出した島の姿が想像される。完新世段丘は、西岸では風成砂に覆われ、低木の繁る東岸とは対照的な景観をなしている。

地形と地質との対応は顕著で、特に海岸線の出入りは基盤の岩石の岩相や走向にかなり支配されている。西岸には一部離水した完新世のサンゴ礁が貧弱ながら分布している。

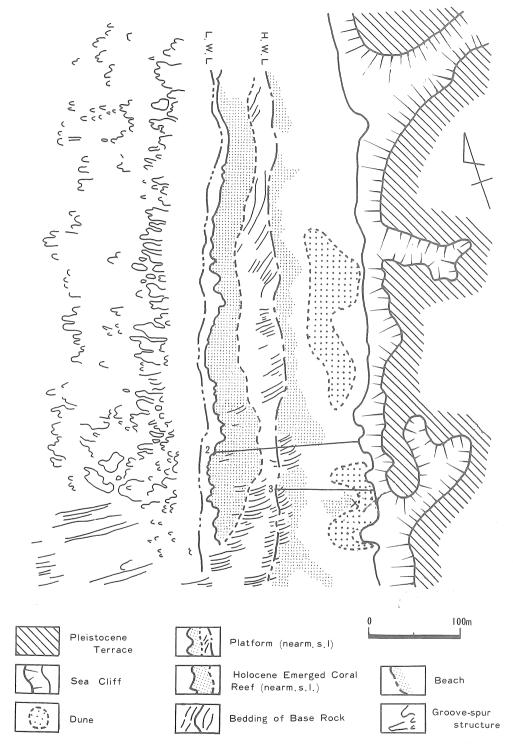
2. 南西岸の地形

遺跡の発見された南西岸の地形について概述する。

第2図は、1975年撮影の約3000分の1空中写真判読および現地調査から作成した地形分類図である。高位の地形からみていくと、海岸線にほぼ平行に走る比高10m程度の完新世の海食崖が、洪積世段丘面と完新世段丘面を分けている。海食崖はところにより洪積世段丘の開析谷壁に連続している。

完新世段丘はきわめて発達が貧弱で、現海面に対応した明瞭な海食崖は、段丘面高度が低いこともあって形成されていない。段丘面には、離水後堆積した風成砂が広く 覆い、一部に砂丘が形成されている。比較的風成砂の薄い、開析谷の出口などでのハ

-3 -



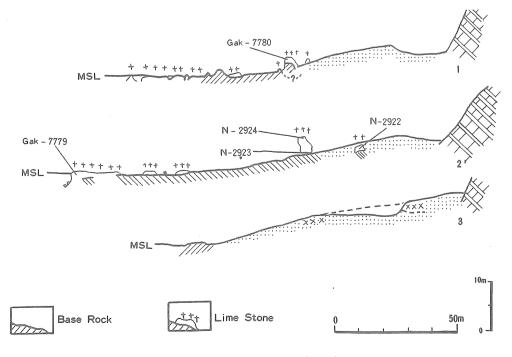
第2図 馬毛島西岸の地形分類図 HWLは大潮の平均高潮位,LWLは略最低低潮位を示す。 ※印は遺跡地を示す

ンドボーリングから推定される海食崖下での完新世段丘面高度(旧汀線高度)は4~5 mとなる。

現海面付近には、潮間帯、特に平均潮位にほぼ一致して幅70~80mのプラットフォームが形成されている。その陸側約半分が基盤の岩石を切って発達しているのに対し海側は完新世の離水サンゴ礁石灰岩を切っている。プラットフォーム上には比高60~80cmの石灰岩の突出部が残っている。サンゴ礁石灰岩の層厚は、陸側で20cm程度と薄く、プラットフォーム外縁で1.5 m以上となっている。外縁の、ほぼ平均潮位に位置する傾斜変換部からは、急斜面となって海中に没している。また空中写真からは、この急斜面がサンゴ礁特有のグループ・スパー構造をしていることが判る。海面下では石灰岩はさらに厚くなっていると推定される。

この他完新世段丘面や、島の北西部、洪積世段丘面外縁部に、2~4m大のサンゴ 礁石灰岩が計10個程のるのが確認されたが、多くは海面下よりうち上げられたものと 考えられる。

表1, 第3図に, 西岸に分布する完新世離水サンゴの14C年代測定結果ならびにサンプル採取地点のプロファイルを示しておく。第3図には遺跡地のプロファイルもあ



第3図 サンプル採取地点。遺跡付近のプロファイル

-5 -

わせて示した。N-2923, N-2924から求められるこの付近での完新世サンゴ礁の上方への成長速度は $1.5\,\mathrm{m}$ / $1000\mathrm{y}$ 程度となる。

馬毛島西方約50kmの海底の鬼界カルデラから、完新世の6000~6500y.B.P.の一時期に大量の噴出物(火砕流、軽石、火山灰など)が噴出し、この時のアカホヤ火山灰は偏西風により遠く関東まで分布していることが知られている(町田、新井、1976;1978;町田、1977)。種子島の「赤ボコ」は、その大部分がアカホヤ火山灰と同一噴火輪廻の幸屋火砕流堆積物であることが判っている(町田・新井、1978)。アカホヤ火山灰は、その噴出年代や分布の広域性から、完新世の海水準変化史や縄文土器の編年などに広く利用できるテフラであるが、馬毛島の完新世段丘上にはのっていない。種子島の甲女川河口や屋久島の一湊川河口の沖積層には、厚いアカホヤ火山灰層が介在する(初見、1979)。その状態からみて、この地域では、アカホヤ火山灰の噴出、堆積したのは、完新世の海進の極相期の直前だったとみられる。

したがって馬毛島では、大きくみれば、約6000y.B.P.まで相対的海水準は上昇し、その後下降したと考えられる。相対的最高海水準は4~5mに達したと推定される。その間サンゴ礁は、海面すれすれというよりはある程度の水深のところで形成され、海退に伴って一部離水、浸食され、現在に至っている。

段丘面の離水後,風成砂が堆積したが,今回の遺跡は,その砂丘の上部から発見された(第2回・第3回)。

Code No.	Coral species		Radiocarbon age (y. B. P.)	Occurence
Gak-7780	Cyphastrea sp.	4.1	4600 ± 110	coral block(in situ?)
Gak-7779	Porites sp.	0.0	4220 ± 120	erosional reef flat
N-2922	?	5.5	2440 ± 65	coral block(drived?)
N-2923	?	4.3	5520 ± 75	"
N-2924	?	8.0	2510 ± 60	"
	ak- 7780 ak- 7779 N- 2922 N- 2923	ak-7780 Cyphastrea sp. ak-7779 Porites sp. N-2922 ? N-2923 ?	ak-7780 Cyphastrea sp. 4.1 ak-7779 Porites sp. 0.0 N-2922 ? 5.5 N-2923 ? 4.3	(m, a, MSL) age (y. B. P.) ak-7780 Cyphastrea sp. 4 . 1 4600 ± 110 ak-7779 Porites sp. 0 . 0 4220 ± 120 N-2922 ? 5 . 5 2440 ± 65 N-2923 ? 4 . 3 5520 ± 75

表1 完新世離水サンゴの"C 年代 Cak - 7780は北緯30°45′11″, 東経130°51′05″で採取。

サンゴの14C年代測定は、ラジオアイソトープ協会、学習院大学木越研究室にお願いした。年代測定には、昭和51・52年度文部省科学研究費総合研究(A)(代表者;太田陽子横浜国立大教授)の一部を使わせていただいた。

註1) 地質時代を明らかにするような化石は発見されていないが、従来、古第三 系に属するもの(Hanzawa, 1935)とされてきた。 (初見祐一)

≪文 献≫

- 貝塚爽平(1973): 島弧系の大地形とプレートテクトニクス. 上田誠也・杉村新編「世界の変動帯」岩波書店、297-305.
- 中田 高 (1968): 種子島の海岸段丘と地殻変動. 地理学評論, 41, 601-614.
- 成瀬 洋 (1974): 西南日本太平洋岸地域の海岸段丘に関する2・3の考察. 大阪経済大論集, 99, 89-126.
- 初見祐一(1979): 薩南諸島北部の完新世海岸地形とその形成について. 都立大修論(MS), 91P.
- 町田 洋 (1969): 薩南諸島の地形 海岸段丘を中心として— . 平山輝男編「薩南諸島の総合的研究」明治書院,20-52.
- 町田 洋 (1977): テフロクロノロジー.日本第四紀学会編「日本の第四紀研究」東京 大学出版会,59-68.
- 町田 洋・新井房夫 (1976): 鬼界カルデラ起源の広域テフラ アカホヤ火山灰—. 火山, 第2集, 21, 200-201.
- 町田 洋・新井房夫 (1978): 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ アカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
- Hanzawa, S. (1935): Topography and Geology of the Ryukyu Islands.Sci. Rep. Tohoku Univ. 2nd Ser. Vol. X X III, 1 −61.

遺跡の位置と環境

遺跡の立地する馬毛島は、屋久島・種子島・竹島・硫黄島・黒島などと共に熊毛諸島を形成しており、屋久・種子の中間東寄りにある。往時このあたりの島々が海上交通の上で重要な位置を占めていたことは、口之島・口永良部島などの島名にその名残りを見ることができる。しかし付近は東シナ海を北上する黒潮が東に向を変えて太平洋に奔出する通路に当り、夏は台風の進路の変化点で、冬は西北季節風の吹き荒れる地域でもある。種子島家譜などに残る南中国・朝鮮などの漂流船の多さがなかなかの難所であったことを物語っている。

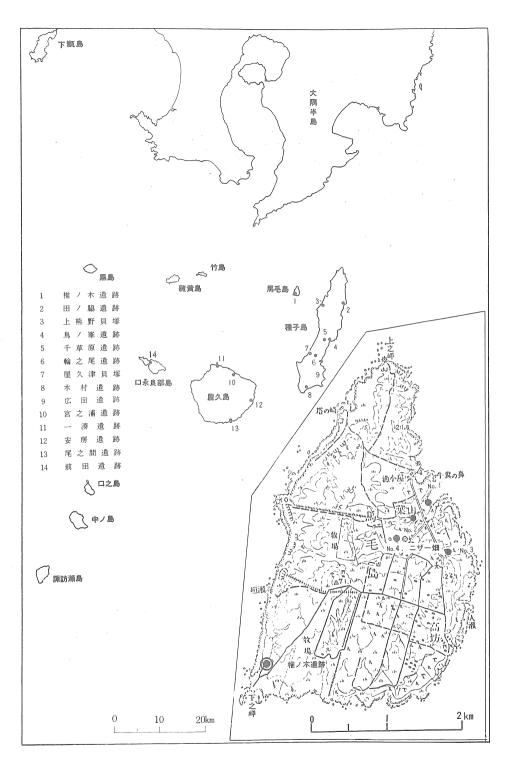
熊毛諸島の先史文化は縄文時代早期以降の全時期にわたり、九州本島の直接の影響下に展開されている。それはやや独自な文化の様相を見せている奄美以南の諸地域に対し、九州文化の前線基地とも云うべき様相を呈している。その中心的な役割を担っているのが種子島である。

種子島西方12kmの洋上に馬毛島がある(図版 I, 上)。周囲10kmほどの小島である。西之表市に所属している。北に頂点を置く底辺 2.5 km, 高さ 4.5 kmの三角形をした低平な小島である(前章参照)。古来, 鹿が群棲し, 室町の頃から種子島家の田猟地に使用されていた。東海岸に蘇鉄の大群落があり, 種子島住民の飢饉時の食糧に利用され,種子島家もそのためにこれを保護している。近世末にいくらか開拓が進み,中央部の葉山, 東南部の高坊などに集落が形成され, 西海岸の垣瀬にも家影が見られたという。この島の付近一帯はトビウオの回遊路に当り, 大規模漁の発達以前は例年5月を中心として種子島本島より季節漁の漁夫が渡来し, にぎわいを見せた。今も季節的な移住集落の跡があり, 西南端下之岬の椎ノ木の廃村跡(図版 II, 上)はその顕著なものである。

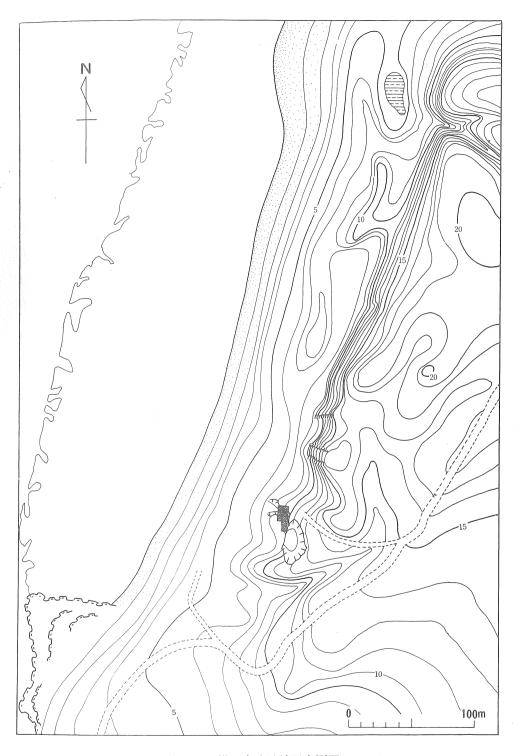
この島の遺跡乃至遺物出土地点については第4図に示す4ケ所が知られているにすぎないが、そのうちの1~3は先史時代に属する。

1の地点では磨製石斧1点が採集されている(図版I下, 馬毛島小中学校教諭, 田 代邦夫氏採集)。水磨を受けて全体に丸味を帯びている。黒色の石材を使用し, 粗く 打彫してそのまま刃部付近だけを研磨してある。脊面には自然面が残存している。

2の地点は県道より20mほど山手の畑で、畦を整形する際に数片の土器片が発見されたという。



第4図 熊毛諸島・椎ノ木遺跡位置図



第5図 椎ノ木遺跡地形実測図

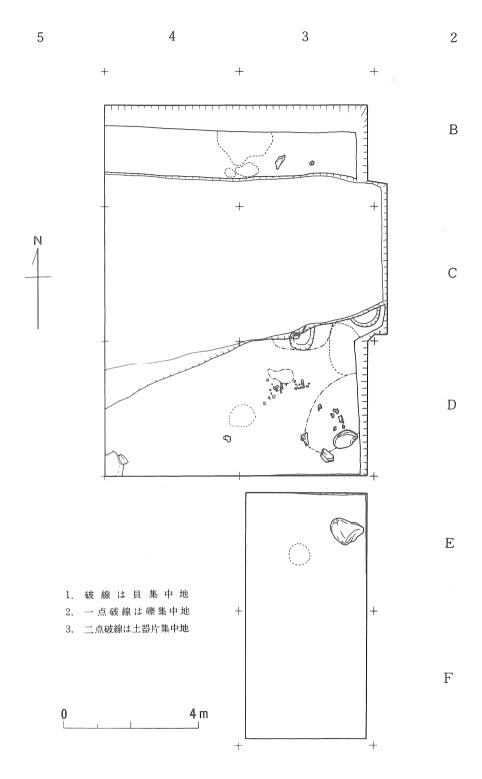
3の地点は西中文夫氏の宅地内で、土器底部と焼土が発見されたことを聞き、調査の合間に試掘したが所見を得られぬままであった。●印の地点が今回調査した椎ノ木遺跡である。遺跡は洪積世段丘面と完新世段丘面を分つ海食崖の下に形成された砂丘に立地している。海食崖の肩の高さは15~18m。遺跡の中を8mと9mの等高線が通過する。遺跡から汀線まで約80m、その前面に幅100mを越える礁原が広がっている。

遺跡の脊後の段丘上面は、島のほぼ中心線を境にして東西の景観を異にする。東側では鬱蒼とした樹林の中に畑地や人家が点在するが、西側は先史人の生活資料の採集に懸念を覚えさせるほどの荒漠とした大原野である。しかしこの植生の相異は明治初年に牧畜のために樹林が拓かれたことに依るのであって、それ以前は東側と同様の樹林を形成していたものと思われる。ちなみに、椎ノ木の地名は椎の大木林に由来するといわれている。付近の人文に関するものとしては南に300mほど離れて椎ノ木の廃村址(図版Ⅱ、上)があり、北300mほどはなれてクワズイモ(Alocasia Macrorrhiza Schott)の群生する沼澤地がある(第5図)。クワズイモは飢饉の時にもこれを食することはなかったというが、所見の限りではその分布は集落乃至集落址と対応関係にある。前述の垣瀬の居住跡に関係する可能性が強い。 (中村 愿)

遺跡の発掘状況

遺跡は砂採り工事によって部分的に破壊されており、砂採りの城の南側の壁に人頭大の石と、それに近接して上顎歯が弧状に露出していた(図版Ⅲ,下)。ここを中心に 4×4mのグリッドを組み、南北をアルファベッドで、東西を数字で示すことにし、人骨露出地点を3-Dグリッドとした(第6図)。

砂の堆積は砂丘の下方(西側)が薄く、上方(東側)に行くにつれて厚くなっている。 発掘地点の更に東側、即ち海食崖に近接するあたりが気がかりであったが、作業量の 倍加が予想され、時間その他の制約を考慮して調査を図示の範囲にとどめた。発掘面積は $3-C\cdot D\cdot E\cdot F$ 、4-Dの計5グリッドと3-B,4-Bグリッドの各一部計 $120\,\mathrm{m}^2$ である。



第6図 椎ノ木遺跡グリッド設定及び平面図

【 I 層】表土層で腐蝕物に汚染されて黒褐色を呈する。北東側に厚く、約30cm。西側では約20cm。3-E 南側と3-F の中央部の大半は後述のⅢ層まで削平されていた。

【Ⅱ層】黄白色の無遺物層である。厚く堆積しており最深部は1m を越える。やや粗めの砂で層の下半分は固くしまっている。

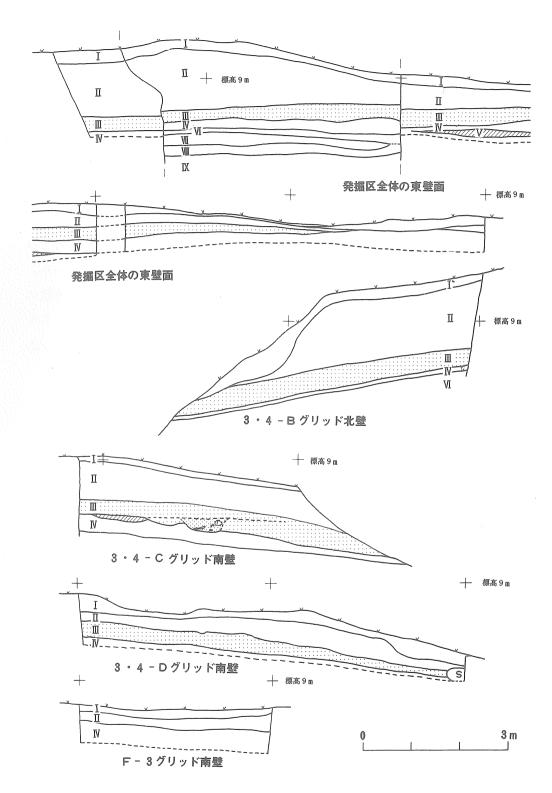
【Ⅲ層】暗褐色砂層で唯一の文化層である。層の厚さは40cm前後で、埋葬人骨の周辺部はやや厚い。この層の上から20cmのあたりまで遺物の検出はなかった。20~30cmのあたりで砂の色が僅かに濃さを増し、遺物が出土し、また皿状の浅い掘り込みが検出された。遺物は土器片と貝殻で、その分布は北東方向に濃く、特に3・4−Bグリッドでは貝殻が、3−Dグリッドの東側では土器片が目立っていた(図版Ⅲ、上下)。土器はいずれも細片であるが、全姿のうかがえたもの(第10図、12;3−D出土)の他、3~4個体の各1部分であると推定された。貝殻はそのほとんどが表2の小形の貝類で、直径30cmほどに拡がった小ブロックの集合の様相で散乱していたが、特に4−Bグリッドでは一抱えほどの容器から一気にぶちまけたような拡がりを示していた。これらの遺物は全て単一の面上にあり、しかも数個の土器片あるいは数十個の貝殻といったまとまりがくずされていないので、まんべんなく人の往来した遺跡の中心からはずれた状態を示すものと思われた。

【 \mathbb{N} 層】白砂の無遺物層である。厚さは約40cm。層の上面から10cmのあたりにレンズ状に挟まれている水磨を受けた礫群が見られた。3-Cグリッドの東壁では \mathbb{N} ・ \mathbb{N} 層の灰褐色層と区別できたが、他のグリッドでは単一の白砂層で区別が困難であった。

【V層】IV層の白砂層に,汀線に露出する基盤と同質な鶉卵大~拳大の水磨を受けた礫がレンズ状に挟まれており, $3-C\cdot D$ グリッドの一部に集中部分がみられた(図版VII,下)。はじめ人工の集石かと思われたが,この高度面では人工の遺物が全く発見されず,しかも礫の大きさや形状がいちじるしく不揃いであり,他のグリッドでも同じ高さに同様な礫が散在していた。決定的な証拠があがらぬままであったが,この様相から自然による可能性が強いと判断し,これをV層とした。

【Ⅵ層】灰褐色層で調査区の東端壁のみにみられ、壁面の南側では下層の™層と接触 していた。

【VII・IX層】白色砂層である。掘削深度は表土最高部より2.5m である。(中村 愿)



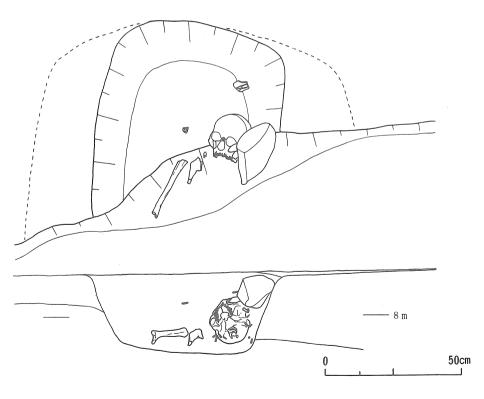
第7図 断面実測図

人骨と土城

人骨の処置については歯列の露出している砂採りの拡の壁面とその崩落部分を探査 することから着手した。崩落部分は砂採りの拡の底に扇状に拡がっており、黒く汚染 しているため周辺の白砂と明確に区別することができた(図版 V 、上)。

壁面の精査につれ、埋葬用の土城の掘り込み線が確認された。崩落部からは板状の 珊瑚礁片 4 個、水磨を受けた人頭大の円っこい石 2 個があらわれ、その下や周辺に、 ツノガイ製品や、多量の小骨片と 2~3 個の長管骨がみられた。

これらの骨片には下肢骨・骨盤・左肩胛骨がみられず、且つその崩落砂の乗っている白砂は締りがなくて踏み荒された様相を呈し、しかも現代の物品片を含んでいた。 これらのことは、砂採り工事によってまず下半身が持ち去られ、その後、更に上部の骨を包みこんだまま壁面が崩落して現状に至ったことを示している。



第8回 土拡・人骨実測図

土城のプランは第Ⅲ層を20cmほど掘り下げた段階で確認された(図版Ⅵ)。城の内側は外側に比して黒く,且つ砂の締りが弱い。また同レベルの周辺では土器片や貝殻類がみられたが,プラン内では2片の土器の細片がみられたのみで,他の遺物は発見できなかった。なお,土城のプランの更に外側,第8図の破線で示すあたりまで,その砂がうすく汚染された様相を示していた。土城はほぼ南北方向に掘られた幅70cm,深さ40cmほどのやや曖昧な形の長方形で,その北部は採砂のため削り去られている。

頭骨はこの城の西壁に片寄り、頭頂部を南、前頭部を上にして置かれてあり、その 左側頭部の上に、当初から採砂城壁面に露出していた塊石が乗りかかった形で置かれ てあった(図版V、下)。

頭骨の下面と同高位で右肩胛骨・右上腕骨が発見された。副葬品としては前頭部の あたりと頚椎骨の周辺でツノガイや貝小玉が多量に出土した。また頭蓋骨と肩胛骨の 間で水晶一個が発見された(図版 ▼,上)。

(中村 愿)

出土遺物

1. 自然遺物

貝類、甲殻類、獣骨、魚骨を検出した。遺物包含層(第皿層)中にはいくつかの小さな貝だまりが認められ、特に $3-D\cdot 3-B$ グリッドに集中度が強かった。出土した自然遺物は全て採取したが、3-B グリッド貝だまりについては、その $\frac{1}{2}$ を採取した。内訳を表 2 に示す。

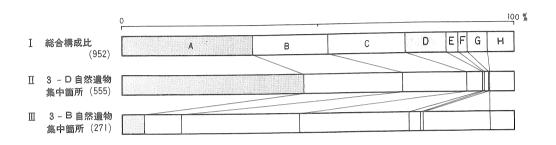
a) 貝類・甲殻類

貝類は表2の26種を判別した。このうちキクスズメガイはイボアナゴに付着したまま採取され、マイマイ類は貝類廃棄後に混在したものであろう。イモガイ科の貝は水磨が著しく、貝殻としてもたらされた可能性が強い。

具類のほとんどは潮間帯岩礁性のもので占められ、眼前の礁原との対応関係を推定できる。イシダタミガイ、アマオブネガイ、クマノコガイが全体の7割強を占める。

甲殻類ではカメノテが多い。貝だまりの中ではカメノテのみ他の貝を混じえずに出 土する部分がある。 3-Dと3-Bの貝だまりの構成比を全体の構成比に比較すれば第9図のようになる。3-Dグリッドではイシダタミガイ,クマノコガイ,アマオブネガイが圧倒的であり,3-Bグリッドではアマオブネガイ,カメノテ,クボガイ類が集中する。

出土状況・貝種より判断して、これらの貝類が意図的に採取され、食用に供されたことは明かである。巻貝では体層・次体層に小孔等をのこす例も多いが、破損痕に関して一定の規則性をみちびくには至らなかった。



第9図 自然遺物構成比(魚・獣骨を除く) ()内は個体総数

A イシダタミガイ B クマノコガイ C T マオブネガイ D カメノテ E イボアナゴ F ベッコウガサガイ G クボガイ・ヘソアキクボガイ H その他

b) 獣・魚骨

獣骨は全て細片で種名を判定し難い。いずれも焼けている。 魚骨ではベラ科、ハリセンボン科を判別し得た。いずれも焼けている。

2. 人工遺物

土器・石器(包含層出土), 貝製品・加工痕らしき断口をもつ水晶(1号人骨供伴)がある。

a) 土器(表3, 第10図1~12, 図版IX)

破片のみである。細片まで含めると口縁部5, 脚部8, 無文胴部65, 有文胴部7を 数える。これらは調整技術・器形により2種に分類できる。

Ⅰ類は第10図12・図版IX,上に示す土器で,器壁厚1 cm,外器面に粗いヘラミガキをもつ。外反する口縁をもち,口縁端は内側へわずかに張り出す。II類は器壁厚0.3 ~ 0.4 cm,ハケ目調整を主体とし,ヘラケズリの痕跡を認める。口縁は外反し,脚台を

 種 名							表 3	の [[表 3	Ø 	表3	のΙ
軟体動物門 腹足綱	3 - D 第Ⅲ層	4 – D 第Ⅲ層	3 - E 第Ⅲ層	人骨土纮	小	計	3 - D 集 中	自然物 箇 所	4 – B	第Ⅲ層	3 - B 集 中	自然物 箇 所	Ē	†
1 イボアナゴ		13個	1個	1個	15個	15.62%	3 個	0.54%	2個	6.67%	8個	2.95%	28個	2.94%
2 オオツタノハ							1	0.18					1	0.10
- 3 ベッコウガサガイ		6	1		7	7.29	10	1.8	4	13.33	1	0.37	22	2.31
4 クズヤガイ							1	0.18					1	0.10
5 クボガイ											19	7.01	19	2.00
6 ヘソアキクボガイ							1	0.18	1	3.33	27	9.96	29	3.07
7 クマノコガイ	3	1	2	3	9	9.37	145	26.13	1	3.33	25	9.23	180	18.91
8 ニシキウズガイ							1	0.18					1	0.10
9 イシダタミガイ	28	4	1	3	36	37.5	257	46.31	11	36.67	16	5.,90	320	33.61
10 コシダカサザエ							5	0.9			1	0.37	6	0.63
11 アマオブネガイ	12	3		2	17	17.70	85	15.32	4	13.33	82	30.26	188	19.75
12 フトスジアマガイ							1	0.18					1	0.10
13 マルウズラタマキビガイ											6	2.21	6	0.63
14 カヤノミカニモリガイ											1	0.37	1	0.10
15 キクスズメガイ	1			1	2	2.08	5	0.9					7	0.74
16 ラクダガイ											1	0.37	1	0.10
17 ヤクシマダカラガイ	1				1	1.04							1	0.10
18 ヒナヅルガイ											1	0.37	1	0.10
19 ホラガイ	1				1	1.04							1	0.10
20 テツボラ		3			3	3.12	1	0.18	2	6.67	2	0.73	8	0.84
21 イソニナ							10	1.8	1	3.33	1	0.37	12	1.26
22 ヒメイトマキボラ	1				1	1.04			1	3.33			2	0.21
23 イモガイ科							1	0.18					1	0.10
24 マイマイ類							3	0.54			2	0.73	5	0.53
斧足綱	-													0.00
25 リュウキュウマスオガイ							1	0.18	2	6.67			3	0.32
多板綱								_				0.50		0.46
26 ヒザラガイ		1			1	1.04	1	0.18			2	0.73	4	0.42
節足動物門														
甲殼綱												00.04	101	10.61
27 カメノテ		2			2	2.08	1	3.96	1	3.33	76	28.04	101	
28 カニ類		1			1	1.04		0.18	00/12	00.00%	071 /17	00.00%	2	0.21
計	47個	34個	5個	10個	96個	99.96%	555個	100.00%	30個	99.99%	271個	99.96%	952個	99.99%
育椎動物門			1											
哺乳綱							он		C IL					
29 種名不明							2片		6片					
硬骨魚綱														
30 ベラ科		5片												
31 ハリセンボン科	2 片	3片			<u> </u>									

もつ甕形土器と推測される。口縁端に三角形の肥厚帯を貼付し、ハケ目調整により外対する面を整える。内側では粘土を押し当てた上にハケ目調整を施し、粘土継ぎ目を明瞭に残す。 I、 I 類ともに土器内面は黒化し器面の粗れたものも多く、これらが煮沸具として使用されたことを示す。

Ⅱ類土器は上能野式土器の特徴を備え、弥生式後期土器の範疇で把握できる。 Ⅰ類 土器に関しては類例等不明瞭であるが、出土状態よりみて同時期のものといえる。

b) 石器(表3, 第10図13)

すり石1が出土した。

c) 貝製品(表3, 第11図)

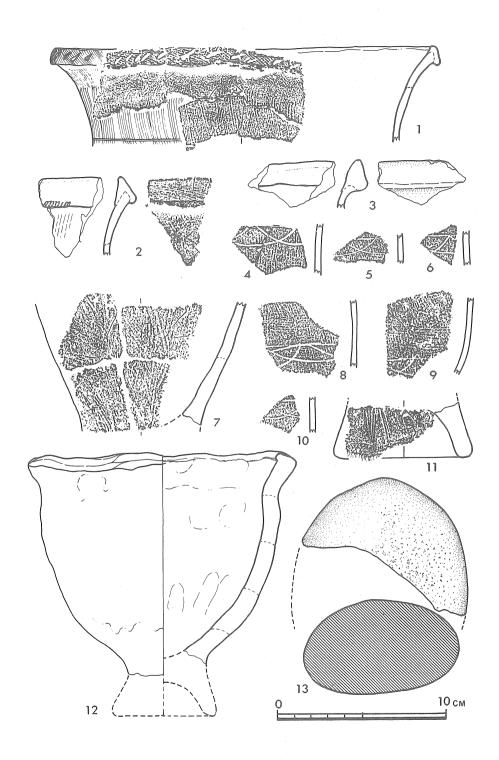
4-D 第Ⅲ層より、中央に孔を穿ったオオツタノハ1が出土した。食料残滓の可能性もあるが、一応未製品として扱う。

人骨に伴う貝製品に貝小玉(図版X]、上)・ツノ貝製品(図版X)がある。貝小玉は総計85個を数え、形態上 2 種に分けられる。 I 類とするものは、径 4 mm前後の円筒形をなし、出土貝小玉の大部分を占める(第11図 2 ・ 4 ~10)。上面は端正な円形をなし、高さ 1 ~4.4 mmを計る。上面・側面に螺塔部の縫合がらせん状に認められる。また上面の孔周辺に打割痕を残すものも多い。 I 類とするものはボタンに似た形状を示し、 I 類よりやや大きめ、量的には少ない。マダライモ等小型イモガイの螺塔部を利用したものであろう(第11図11)。

I 類では外面に貝本来の形状や面を残さぬまで研磨整形が行われるが、Ⅱ 類では貝本来の形状はやや保たれる。Ⅰ・Ⅱ 類貝小玉の大きさの集計表を掲げる(表 4)。

ツノガイ製品にはニシキツノガイ製とマルツノガイの類の2種類がある(第11図13~20)。前者60個,後者208個を数え,内25個が連結したまま出土した。それぞれ首飾等として繋っていたものであろう。上端をわずかに研磨したものもあるが,多くは整形されていない。

ニシキツノガイの殻表は本来紫紅色を呈し緑・黄・白等の輪彩をもつ。紀伊以南の潮間帯下の細砂底にすみ、現在でも海岸で打ち上げ貝の採取が可能である。遺物中にも表面のかなり磨耗した例があり、打ち上げ貝を採取したものであることがわかる。マルツノガイ、ミガキツノガイは水深10m以下の砂泥底に生息するが、前者はいその打上げ貝としても採取できるとされる。



第10図 遺物実測図(1)

		説明	
対照図・番号	遺 物	1)器面 2)胎土 3)調整等 4)その他	出土状態
10図 1	土器口縁部	1) 橙褐色, 内面は黒褐色, 内器面は粗れる。 2) 1 mm前後の石英・黒色粒子を多く混入。 3) ハケ目調整。口縁部胞厚帯にヘラによる刻	73 - D 第Ⅲ層 下部
2	土器口縁部	文を施す。4)器壁厚3mm。焼成良好。 1)橙褐色,内器面やや粗れる。2)1と同様 の混和材に雲母を加える。3)ハケ目調整。 4)口縁部内面に粘土継ぎ目明瞭。器壁厚3~	3 · 4 - B 第 Ⅲ層
3	土器口縁部	4 mm。焼成良好。 1) 橙褐色,外面の口縁肥厚部先端を中心に黒ずむ。2)2に同じ。3)ハケ目調整。4)口縁的内面で粘土継ぎ目明瞭。器壁厚3mm。焼成	4 - B 第Ⅲ層
4	土器胴部	良好。 1) 橙褐色。2) 1に同じ。3) ハケ目調整。 へラにより沈線文を施す。4) 器壁厚3mm。焼 成良好。	3 - C 第Ⅲ層
5 · 6 · 10	土器胴部	放民好。 1) 黄褐色,内器面は黒ずみ,器面粗れる。 2) 1に同じ。3) 4に同じ。4) 4に同じ。 3片は同一個体破片。焼成良好。	3 - D 第Ⅲ層 下部
7	土器胴部下 部	1) 橙褐色。内器面は黒ずみ,器面粗れる。 2) 2に同じ。3) 粗いハケ目調整。4) 底部 は脚状か。焼成良好。	3 · 4 - B 第 Ⅲ層
8	土器胴部	1) 橙褐色。2)1に同じ。3)ハケ目調整。 4)器壁厚3~4mm。焼成良好。	3 - C 第Ⅲ層 (1号人骨直上)
9	土器胴部	1) 橙褐色。内器面黒ずむ。2)1に同じ。 3)ハケ目調整。4)8に同じ。	3 - D 第Ⅲ層 下部
11	土器底部	1) 橙褐色。2) 1に同じ。3) ハケ目調整。 4) 焼成良好。	3 · 4 - B 第 Ⅲ層
12	土器 (底部 を欠く)	1) 橙褐色。内面は口唇部に至るまで黒ずみ器面は粗れる。2)径1~2mmの石英・黒色粒子多く混入。3)ハケ目調整は認められない。外面はヘラミガキにより調整を行う。4)口縁のつくりはいびつ。焼成良好。	3 - D 第Ⅲ層 下部一括
13	すり石(半 欠)	砂岩製。全面研磨。二次的な打撃により一部表層が剝離する。周縁部でわずかに面をもつ。 362g。	4 - B 第Ⅲ層
11図 1 ~10	貝 小 玉	上面・周縁部に入念な研磨を加える。上面を平 坦に整えるもの、孔周辺をやや高くするものが ある。下面の研磨は粗く、ややいびつ。	人骨共伴
11 12	マダライモ 水 晶 製 品	参考資料 自形結晶。二叉の形状は平行連晶。結晶面のひ	人骨共伴
13 ~15	ツノガイ製 品	とつに小断口を2ケ所認める。 ニシキツノガイ(フトツノガイ)製。13は磨耗に より表面の肋が消失している。	人骨共伴
16	m ツノガイ製 品	より表面の加が有失している。 ツノガイ・マルツノガイの類。厚さ0.5mm以下。 2 ~3個連結したままのものもある。	人骨共伴
21	未製品か	オオツタノハ。 殻頂部外側より加撃,穿孔。 表面の付着物著しい。	3 - D 第Ⅲ層 下部

表3 出土遺物一覧表

I類	T ske	(47)	= × / [44	4 1	2 2
2 3.4 2.5 46 4.1 2.4 3 3.5 1.0 47 4.1 2.4 4 3.5 2.3 48 4.1 2.7 5 3.7 1.8 49 4.1 2.8 6 3.7 2.8 50 4.1 2.8 7 3.8 1.9 51 4.1 2.8 8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 6	I類	1	1 1	44	4.1	2.2
3 3.5 1.0 47 4.1 2.4 4 3.5 2.3 48 4.1 2.7 5 3.7 1.8 49 4.1 2.8 6 3.7 2.8 50 4.1 2.8 7 3.8 1.9 51 4.1 2.8 8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6	1			1		
4 3.5 2.3 48 4.1 2.7 5 3.7 1.8 49 4.1 2.8 7 3.8 1.9 51 4.1 2.8 8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 <t< td=""><td>ı</td><td>1</td><td>- 11</td><td>1</td><td></td><td></td></t<>	ı	1	- 11	1		
5 3.7 1.8 49 4.1 2.8 6 3.7 2.8 50 4.1 2.8 7 3.8 1.9 51 4.1 2.8 8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2		1				
6 3.7 2.8 50 4.1 2.8 7 3.8 1.9 51 4.1 2.8 8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 59 4.2 1.8 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 <	1					1
7	1	1				1
8 3.8 2.2 52 4.1 3.0 9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.1	1	1	1			
9 3.8 3.0 53 4.1 3.0 10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 66 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.1 69 4.2 3.0 24 4.0 2.1	1	1 .	ľ			
10 3.8 3.2 54 4.1 3.1 11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 21 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 72 4.3 <td></td> <td>1</td> <td>I .</td> <td>1</td> <td></td> <td></td>		1	I .	1		
11 3.8 3.5 55 4.1 3.1 12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2	1	1			1	
12 3.9 1.1 56 4.1 3.1 13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 <td>i</td> <td>ı</td> <td></td> <td>l .</td> <td>1</td> <td>1</td>	i	ı		l .	1	1
13 3.9 1.6 57 4.1 3.2 14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.5 77 4.5 <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td>	1	1		1	1	1
14 3.9 1.8 58 4.1 3.5 15 3.9 1.8 59 4.2 1.8 16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.5 77 4.5 <td>1</td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td>	1	1	1		1	1
15			1	1	1	1
16 3.9 2.0 60 4.2 1.9 17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 72 4.3 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5		Į.		1	1	1
17 3.9 2.1 61 4.2 1.9 18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 31 4.0 2.2 73 4.3 2.4 31 4.0 2.2 75 4.4 1.8 31 4.0 2.5 78 4.6 4.4 33 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 <td>1</td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td></td> <td></td>	1	1		1		
18 3.9 2.6 62 4.2 2.0 19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 72 4.3 1.8 30 4.0 2.2 73 4.3 2.4 31 4.0 2.2 75 4.4 1.8 31 4.0 2.5 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 82 6.1 <td></td> <td>4</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>ł .</td> <td>- 1</td>		4	1	1	ł .	- 1
19 3.9 3.0 63 4.2 2.1 20 4.0 1.9 64 4.2 2.1 21 4.0 2.0 65 4.2 2.1 22 4.0 2.0 66 4.2 2.2 23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 73 4.3 2.4 31 4.0 2.2 75 4.4 1.8 31 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 11 11 11 36 4.0 2.6 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1	1	1		II.	1	- 1
20	1	1	1	1	l .	
20	1	1		1		
22	1	1 .		1	l	
23 4.0 2.0 67 4.2 2.4 24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 11類 36 4.0 2.6 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 84 6.2 2.3 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3 <td></td> <td>1</td> <td></td> <td>1</td> <td>1</td> <td></td>		1		1	1	
24 4.0 2.1 68 4.2 2.8 25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 74 4.4 1.8 30 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 36 4.0 2.6 II 類 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 84 6.2 2.3 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	1		1	1		
25 4.0 2.1 69 4.2 3.0 26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 36 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 84 6.2 2.3 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	1	1			4.2	2.8
26 4.0 2.1 70 4.2 3.1 27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 36 4.0 2.6 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3			1	1	4.2	3.0
27 4.0 2.2 71 4.2 3.3 28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	1 .	1		70	4.2	3.1
28 4.0 2.2 72 4.3 1.8 29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 84 6.2 2.3 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3		1	i	71	4.2	3.3
29 4.0 2.2 73 4.3 2.4 30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3		l l		72	4.3	1.8
30 4.0 2.2 74 4.4 1.8 31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3				73	4.3	2.4
31 4.0 2.2 75 4.4 1.9 32 4.0 2.3 76 4.5 1.6 33 4.0 2.5 77 4.5 2.9 34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3		4.0		74	4.4	1.8
33	1	4.0	2.2	75	4.4	1.9
34 4.0 2.5 78 4.6 4.4 35 4.0 2.6 II 類 36 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	32	4.0	2.3	76	1	1
35	33	4.0	2.5	77		2.9
36 4.0 2.6 79 4.6 1.7 37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	34	4.0	2.5	l 1	4.6	4.4
37 4.0 2.8 80 4.9 2.0 38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	35	4.0		1 1		
38 4.0 3.0 81 6.0 4.0 39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	36	4.0	2.6	! !	1	
39 4.0 3.2 82 6.1 2.2 40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	37	4.0		11	1	1
40 4.1 1.3 83 6.1 2.6 41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	38	1		11	1	
41 4.1 1.7 84 6.2 2.3 42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	39	4.0		11	1	
42 4.1 1.9 85 6.2 2.3	40	1		11	1	
	- 1			1 1		1
43 4.1 2.2 (単位 mm)	1	1		85		
	43	4.1	2.2]	(単	位 mm)

d) 水晶(表3, 第11図12)

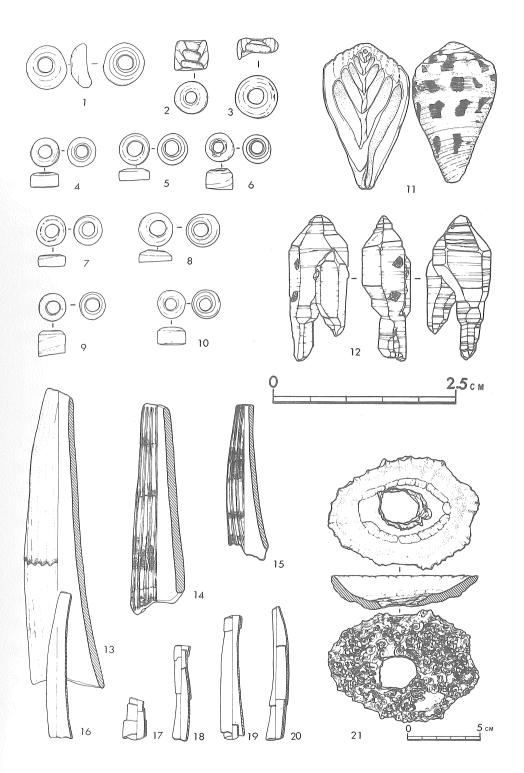
自形結晶体を採取したものである。一結晶 面に2つの小断口を認めるが、加工を試みて 放棄した痕跡であろうか。

水晶の産出地に関しては武内浩一氏より下記の教示を得た。「石英中に流体包有物が認められ、中の気泡の充填度から考えるとかなり高温での生成が想定される。以上のような地質条件は高熱水条件下である。最も近距離では屋久島が想定される。」

(註) 貝の種名(和名)は下記の文献に従った。波部忠重・小菅貞男 『標準原色図鑑全集3 貝』, 1967 保育社 東京。

なお、貝に関する記述も上記文献によった。 (木下尚子)

第4表 貝小玉計測表



第11図 遺物実測図(2)

「椎ノ木遺跡出土人骨について」

【1】 はじめに

鹿児島県馬毛島椎ノ木遺跡は馬毛島の南西隅,広く海岸を見渡す砂丘上に位置する。 1979年夏の発掘により、弥生終末期(別項参照)のものと見なされる人骨一体が出土した。

この地方における弥生相当期の埋葬人骨としては種子島広田遺跡,鳥ケ峰遺跡,鹿児島県成川遺跡及び奄美大島宇宿貝塚等があるがいずれも少数で,九州北部の弥生人骨と比較した場合,その形質を探る上においてまだ十分とは言い難い。本人骨は採砂作業によって残念ながら大部分の体部骨が失なわれているものの,幸いにして頭蓋骨はほぼ良好に遺存しており,わずか一体ながら貴重な追加資料となり得るものである。復原後の観察,計測結果を同じ弥生時代人骨である山口県土井ケ浜遺跡人骨,西北九州弥生人骨,及び現代与論島民人骨等と比較検討したので,以下にその結果を報告する。

【2】出土状況

本人骨の下半部は採砂作業のために全て失なわれており、埋葬時の元位置を保っていると見なされるのはわずかに頭蓋骨と上位頚椎、及び右肩甲骨、右上腕骨のみである(図版V、下)。下顎骨も関節部からずり落ちて左半部は削り取られており、他の遺存骨は全て断面下の砂中に散乱した状態で見出された。

頭蓋骨は頭頂をほぼ南に、顔面を右上方に仰向けた形で出土し、第3頚椎までは頭蓋骨に関節したままであった(図版 VI、下)。四肢骨のうち回収できたのは、手骨の一部を除く左右上肢、及び上肢帯骨だけで、下肢骨は一片も見出されない。また、肋骨の一部と頚椎、及び第11・12胸椎までは確認できるが腰椎以下はやはり失なわれている。この遺存している肋骨や脊椎骨の体部における位置関係と前腕骨が残されている点から考えて、一応、肘関節が曲げられた状況での埋葬姿勢が推測される。左手基節骨の一部が頭蓋骨の左側に接して見出された点もこの推定を裏づけるものであり、全体的にみて仰臥していたと考えるのが自然であろうし、また下肢骨が全然存在しない点から考えて、少なくとも強度の屈葬ではなかったとも推察されるが、いずれについても上記のような出土状況なので確言はし難い。

【3】所見

3-1. 性別・年令

本人骨の性別,年令推定の試料になり得るのは頭蓋骨と上肢骨の一部のみであるが, 眉間部の膨隆がかなり明瞭で, 頬骨縁結節, 乳様突起, 外後頭隆起の発達がいずれも 強く, 上腕骨三角筋粗面の発達もこれに対応して非常に良好である点, また頭蓋骨に おける主縫合にまだ癒着が認められず, 歯牙の咬耗度(Broca の2度)等からみて, 比較的若い, 成年, 男性人骨とみなされる。

3-2. 観測・計測結果

(A) 頭蓋骨

鹿

す

頁

ł

Í

左右眼窩部,頰骨弓の一部,及び蝶形骨,下顎骨左半が失なわれているが,保存状態はほぼ良好である。得られた計測値を比較群と共に表5に,また土井ケ浜人骨を基準線にしたモリソン氏偏差折線を第7図に示した。なお,頭蓋骨のほぼ全面に渡ってネズミのものと思われる歯跡が無数に見られ,特に前頭,頭項骨の骨表面はそのために著しく損傷している。

1. 脳頭骨

頭頂結節の発達は著明で、乳様突起、外後頭隆起(Broca の 3度)も強く突出している。特に外後頭隆起の左右の上項線にそって孤状の隆起、即ち後頭隆起が認められ、 左アステリオン部には1個の縫合骨が存在する。また、やや左右非対称性が認められ、 大後頭孔の位置が幾分左にずれている。

表5・第7図から明らかなように、この人骨の脳頭蓋における最も顕著な特色として、頭骨最大長(173mm)が非常に小さく、かわって最大幅(148mm)の大なる点があげられる。これらの値は土井ケ浜(それぞれ、182.8、142.6mm)、西北九州弥生人(182.8、144.9mm)とは明らかに異なり、地理的にも近接する広田弥生人骨(167.6、147.1mm)に相似して、その頭骨長幅示数(85.5)も広田人骨(87.8)同様、過短頭型(hyperbrachykran)に属している。また、やはり広田同様バジオン・ブレグマ高(131mm)がかなり低く、頭骨長高示数(75.7)、幅高示数(88.5)はそれぞれ高頭形(hypsikran)、平頭型(tapeinokran)に属し、この点においても共通した傾向が顕われている。

2. 顔面頭蓋

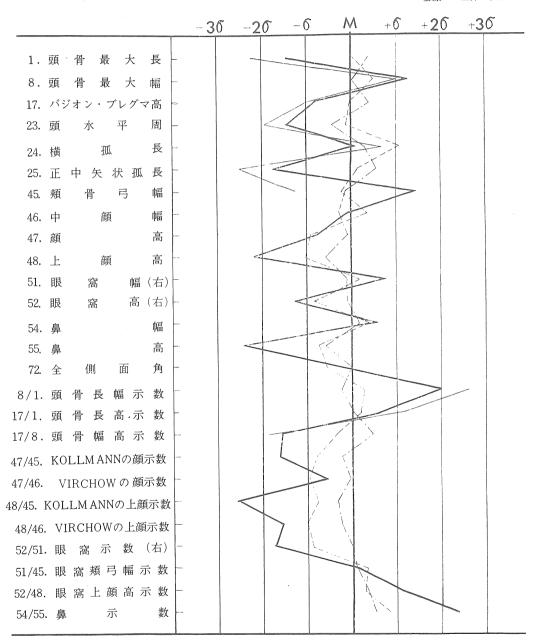
眉間部及び鼻骨の一部が欠損しているが、眉間部の膨隆、鼻根の陥凹は共にやや強

第7図 モリソン氏偏差折線

---- 椎ノ木弥生人 ---- 広 田 弥 生 人

---- 西北九州弥生人 --- 現代与論島民

基線M:土井ヶ浜弥生人



I. 脳頭蓋

() は復原推定値

(株) 大井 子				-		
展 173 182.8 182.8 185.4 167.6 103 101.7 98.7 142.6 144.9 142.8 147.1 98.7 15.9 142.6 144.9 142.8 147.1 98.7 124 120.1 一 117.9 一 127.1 一 118.8 5 一 127.1 14.9 一 115.8 5 130.4 5 255.9 496.3		^ 1	ナ 井 ケ 浜 弥 生 人 璯	西北九州弥生人骨	面	- 11
103 101.7 101.7 98.7 142.8 147.1 148 142.6 144.9 142.8 147.1 124 120.1 124 120.1 124 120.1 134.6 136.5 130.1 131 134.7 134.6 136.5 130.1 110 114.9 115.8 130.1 110	财	l	2 .	2	5	. 7
面面 148 142.6 144.9 142.8 147.1 124 120.1 - 128.5 - 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 - 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 128.5 -	顺	103	101.7	-	101.7	· ∞
面面 124 120.1	哩	1 4 8	•	4.	•	
福 124 120 11	聖	-	~	1		1
福 136 127.1 — 128.5 — 高 117 109.6 — 109.1 — 高 131 134.7 134.6 136.5 130.1 点 1112 114.9 — 115.8 — 点 1110 — 116.8 — 点 316 315.2 324.7 317.7 321.0 版 353 375.3 376.5 382.8 341.0 数 85.5 78.1 79.2 77.3 87. 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87. 数 66.9 67.2 — 76.6 — 数 25.6 25.6 — 76.6 — 数 25.0 — 76.6 — 本 150.7 153.5 (154.1) (154.9) —	四	124	120.1		117.9	
面 117 109.6 — 109.1 — 前 131 134.7 134.6 136.5 130.9 前 112 114.9 — 115.8 — 前 110 — 116.8 — 両 110 — 116.8 — 両 315.2 324.7 317.7 321. 板 85.5 375.3 376.5 382.8 341. 数 75.7 78.1 79.2 77.3 87. 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87. 数 79.1 76.9 — 76.6 — 数 25.6 25.5 — 76.6 — 本 150.7 153.5 (154.1) (154.9) —	盟	136	127.1			
前 131 134.7 134.6 136.5 130. 前 112 114.9 — 115.8 — 前 110 — 116.8 — 点 110 — 116.8 — 点 315.2 324.7 317.7 321. 版 353 375.2 324.7 317.7 321. 数 85.5 78.1 79.2 77.3 87. 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87. 数 66.9 67.2 — 66.6 — 数 25.6 25.5 — 76.6 — 数 25.6 154.1 (154.9) —	聖	1 1 7	109.6		109.1	1
点 112 114.9 — 115.8 — 点 110 — 116.8 — 点 110 — 116.8 — 点 316 315.2 324.7 317.7 321.8 板 85.5 375.3 376.5 382.8 341.6 数 75.7 78.1 79.2 77.3 87.8 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87.4 数 66.9 67.2 — 66.6 — 数 25.6 25.5 — 76.6 — 本 150.7 153.5 (154.1) (154.9) —	回	131	134.7	4.		
高 110 — 116.8 — 高 511 532.3 530.4 525.9 496.8 長 316 315.2 324.7 317.7 321.3 長 353 375.3 376.5 382.8 341.6 数 85.5 78.1 79.2 77.3 87.6 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87.4 数 66.9 67.2 — 66.6 — 数 79.1 76.9 — 76.6 — 数 25.6 154.1 (154.1) (154.9) —	恒	1 1 2	114.9		۰	
両 511 532.3 530.4 525.9 496.8 表 316 315.2 324.7 317.7 321.9 表 353 375.3 376.5 382.8 341.6 数 75.7 78.1 79.2 77.3 87.6 数 66.9 67.2 74.2 73.8 77.4 数 79.1 76.9 - 66.6 - 数 25.6 25.5 - 76.6 - 数 25.0 150.7 153.5 (154.1) (154.9) -	100	1 1 0			116.8	1
版 316 315.2 324.7 317.7 321.9 版 353 375.3 376.5 382.8 341.6 数 75.7 78.1 79.2 77.3 87.6 数 66.9 67.2 74.2 73.8 77.6 数 79.1 76.9 76.6 87.6 数 25.6 25.5 7154.1 76.6 87.6 本 150.7 153.5 154.1 (154.9)	#0	5 1 1	3 2		2 5 .	6
版 353 375.3 376.5 382.8 341.6 数 85.5 78.1 79.2 77.3 87.6 数 75.7 73.7 74.2 73.8 77.6 数 88.5 94.3 93.1 96.0 87.4 数 66.9 67.2 — 66.6 — 数 79.1 76.9 — 76.6 — 数 25.6 25.5 — 26.0 — 本 150.7 153.5 (154.1) (154.9) —	展	-	15.	2 4 .	17.	
数 85.5 78.1 79.2 77.3 87.6 数 75.7 73.7 74.2 73.8 77.6 数 66.9 67.2 66.6 87.6 数 79.1 76.9 66.6 6 数 25.6 25.5 6154.1 154.9 6154.9	忌	2	7 5	. 9 7	8 2	
数 75.7 73.7 74.2 73.8 7 88.5 94.3 93.1 96.0 8 数 66.9 67.2 — 66.6 数 79.1 76.9 — 76.6 数 25.6 25.5 — 26.0 7 153.5 (154.1) (154.9)	数	•	78.1	6		
数 88.5 94.3 93.1 96.0 8 66.9 67.2 — 66.6 数 79.1 76.9 — 76.6 数 25.6 25.5 — 26.0 ス 150.7 153.5 (154.1) (154.9)	数			4		-
数 66.9 67.2 — 66.6 数 79.1 76.9 — 76.6 数 25.6 25.5 — 26.0 又 150.7 153.5 (154.1) (154.9)	数	∞	4		0 . 9 6	
数 79.1 76.9 — 76.6 数 25.6 25.5 — 26.0 又 150.7 153.5 (154.1) (154.9)	示数	9	7			1
数 25.6 25.5 — 26.0 又 150.7 153.5 (154.1) (154.9)	示 数		. 9	1	9	
X 150.7 153.5 (154.1) (154.9)	数		5	1	. 9	1
	アス	0	3	54.	54.	

II. 顏面頭蓋

広 弥生人骨				132.3		1	1	1			1	1		1	1	1	1	1			1	1		1		1	1			
現長論島島民	101.8	106.6	986	138.8	102.0	122.7	70.0	87.3	118.9	0	8 . 8 9	.9 . 8 9	7 . 7 6	18.0	(0) 42.6	(0) 34.0	18.2	8 . 6 7 (9)	30.7	48.3	27.3	51.4	8 . 1	3	53.7	9.99	122.1	83.5°	88.0	. 9
西北九州弥生人骨			1	138.4	105.0	117.1	68.1	84.6	111.8	49.3	64.8	١	(85.5)	1	43.1	3 2 . 8	1	76.2	31.1	48.2	27.8	51.0	1	54.4	1	1	1	82.0.		1
土井ケ浜弥生人骨	6 . 6 6	106.4	100.4	139.4	103.4	123.4	72.4	8 8 . 5	119.3	51.9	70.0	6 8 9	2 . 2 6	19.8	42.8	34.2	19.7	6.62	30.6	47.2	27.1	53.1	8 . 2	51.0	53.1	64.8	122.0	83.6°	88.0.	1
権ノ赤弥生人骨	102	112	104	(146)	(103)	(118)	(63)	8 0 8	114.6	43.2	61.2	. 7	9 8 8 6	2 0	4 4	3 2	6	72.7	. 0	50.8	2 8	4 6	7	6 0 9	(52)	(65)	125.0	83.	. 8 8	69°
	邢	顛	留		題		頭面高	KOLLMANNの顔示数	VIRCHOWの 顔示数	KOLLMANNの上顔示数	VIRCHOWの上顔示数	前頭所		眼 窩 間	衛 幅 (右	员 篇 高 (右)	眼 窩 間 示	窩示数 (右	窩類弓幅示	阿山			骨最小	长	頸棒	颚 搖 木	顎 歯 槽 示	6 側 面 角	侧 面	槽侧面
	40. 顔	43. E	44. 両	45. 頰	46. 中	47. 顔	48. E	47/45. K(47/46. VI	48/45. K(48/46. VI	9 /45. 頰	45/8。横	50. 前	51. 眼	52. 眼	50/44。前	52/51. 眼	51/45. 眼	52/48. 眼	54. 鼻	55. 鼻	57. 鼻	54/55. 鼻	60. E	61. E	61/60. E	.72. 全	73. 鼻	74. 趎

120

各計測値を見ると、頬骨弓幅(146mm)を始めとして幅径がいずれも大きく、高径、特に上顔高(63mm)の小なる点が目立つ。そのためKollmannの顔示数(80.8)、上顔示数(43.2)はそれぞれ広顔型(euryprosop)、過広上顔型(hypereuryen)を示し、比較群中では西北九州弥生人骨(84.6, 49.3)にやや近いが、しかしいずれとの間にも確差がある。またVirchowの示数(114.6, 61.2)で見ると、西北九州弥生人骨(118.8, 64.8)との間により近い関係が示され、その広、低顔傾向における類似性を顕わしている。

眼窩,鼻部においてもその幅,高径の関係は同様で,眼窩示数(72.7)は低眼窩(chamaekonch)を示し、鼻示数(60.9)も過広鼻型(hyperchamaerrhin)に属して、比較群中ではやはり西北九州弥生人に比較的近いが、その差は小さくない。

全側面角は83°で中顎型(mesognath), 歯槽側面角は69°で過突顎型(hyperprognath)に属し, かなりの歯槽性突顎の傾向が認められる。

なお、広田人骨における顔面部の計測値は頰骨弓幅(132.3mm)以外には無いが、当数室所蔵の広田人骨と本人骨を比較観察してみると、かなりの低顔傾向を示す点において脳頭蓋同様の強い類似性が窺える。

3. 歯牙

上顎歯は左側切歯を除いて全て揃っているが,下顎歯で残されているのは下の歯式 に示すように右側切歯より遠心部の歯牙だけである。

咬合形式は中切歯や下顎骨体の大半が失なわれているのではっきりとは確認できないが、上顎切歯の咬耗状態等から見て鉗子咬合であったことが推察される。歯石はかなり付着しているものの歯並びは正しく、咬耗度はほぼBrocaの2度であるが上・下顎ともMu以後は1度を示す。また、上顎左側切歯部の歯槽は閉鎖し、隣接する犬歯が近心方向に傾斜しており、風習的抜歯によるものと思われる。

(B) 四肢骨

四肢骨において遺存しているのは、左右鎖骨、肩甲骨、上腕骨、前腕骨、及び手骨の一部で、下肢骨は無い。上腕骨の各計測値を表6に示した。

上腕骨長(286mm)よりPearson 氏の式により推定身長を求めると153.4cmとなる。一

表6 上腕骨計測值

計 測 部 位	椎 ノ 木 弥生人骨(右)	土 井 ケ 浜 弥 生 人 骨	現 代与論島島民	古胡貝塚縄文人骨
上腕骨最大長	2 8 6	299.4	295.0	282.5
中央最大径	2 4	22.9	23.47	24.6
中央最小径	2 0	16.4	20.06	18.0
骨体最小周	6 8	64.7	63.53	67.2
骨体中央周	7 4		67.33	71.8
· 長 厚 示 数	23.8	2.1 . 2	21.52	24.0
骨体横断面示数	83.3	76.1	75.07	73.2

般に上腕骨長にPearson 氏の式をあてはめた場合,日本人では実際よりやや低い値がでる傾向があるので,この場合も155cm前後の身長を考えるのが妥当であろう。いずれにしてもこの値は土井ケ浜人骨(162.8cm)よりはかなり低く,西北九州弥生人(158.79cm)や成川人骨(160.8cm)とも差があり,頭蓋骨同様,広田人骨(154.7cm)との類似性が認められる。

上腕骨骨は短いながら太く頑強で、三角筋粗面の発達も良く、その中央周径を見ると74mmを示し、これは現代与論島民のみならず、縄文人骨である吉胡貝塚人骨(71.8mm)をも上回り、長厚示数(23.8)も吉胡の24.0に匹敵している。なお、各上肢骨にもネズミの歯跡が無数に印されている。

3-3. 特記所見

後頭骨の上頂線にそって明瞭な隆起,いわゆる後頭隆起が認められた(図版M)。化石人骨やオーストラリア原住民では良く観察されるが,現代日本人はもとより,縄文人においてもこうした顕著な隆起が認められることは珍しい。この部分に付着する僧帽筋や頭半棘筋等,項から背部にかけての筋の強大な発達が推察され,太く頑丈な上腕骨の形質ともよく対応するものである。項及び背筋の強度の発達という点から,一応,上半身の運動の激しい漁捞生活に起因した変化である可能性も考えられるが,ほぼ同地方のやはり海に面した広田遺跡人骨ではこのような顕著な隆起を示す例は見当らない。ただ,広田の場合,漁捞のみならずその自然環境から農耕ないしはそれに類した生活様式の混在も考えられ、当遺跡の環境とはかなり異なるので、本人骨に限られた特異変化なのかどうか、今後の注意事項の1つとしたい。

直が ごれ . 79 上が

0

mm) 、ズ

; と

化文值上

当類

15

ほ

また、本人骨の骨表面には前述のように小動物の歯跡が無数に見られる。頭蓋骨では前頭、頭頂骨及び顔面部に多く、後頭骨には比較的少ない。また、四肢骨の中で元位置を保っていた唯一の部分である右上腕骨においても、大・小結節稜や三角筋粗面等、上面に位置していた部分に多く認められ、全体的に見ても底部になっていた部分に少なく、上、側面に著しい。

九州大学農学部の白石哲助教授、同理学部の江口和洋氏によりこの歯跡がネズミによるものであるのと確認は得られたが、歯跡がかなり摩耗しているためその種の明確な同定までは至らなかった。以下、両氏の意見を基に考察してみると、まずその可能性のある種類として、イエネズミであるドブネズミ、クマネズミ、及び野性種のアカネズミ、ハツカネズミがあげられる。いずれについてもその習性から考えて地表から50cm以上もの穴を掘ってわざわざ骨をかじりに行くことは普通考えにくく、その歯跡の多さや上面に偏している点からも、自然あるいは人為的な作用によって埋葬体が地表面、もしくは地表近くに存在した時に受けた傷と考えるのが妥当であろう。

またその時期については、門歯の伸び過ぎを防ぐために何か硬い物をかじるという ネズミの習性から考えると、必ずしも肉の付着していた時期とは限定されないであろ うが、現在見られるようなかなりもろく変質した骨ではその用も足し得ず、歯跡がか なり摩耗していることから考えても、少なくともまだ骨が十分に硬い、かなり古い時 期のものと思われる。一般的にネズミは肉の付着した骨を好むということであり、そ うした面だけから考えれば上記の四種類のネズミのうち,その食性からドブネズミで ある可能性も一応は考えられる。しかしドブネズミが日本に渡来したのはおおよそ300 年位前の江戸時代と考えられており、上に考察したような歯跡の時期の古さや、歯形 そのものがドブネズミにしてはやや小さ過ぎる点などから考えて,その可能性は少な いと言えよう。またこの歯形を詳細に見るとかなりの大小があり,親や仔を考えるに してもその種類を探る意味においては当然大きい方の歯形に相応するものを見なけれ ばならず、その観点からするならば、かなり小型である野性種のアカネズミやハツカ ネズミの可能性も少なくなる。残されたクマネズミについて見ると,この種は現在は 木造家屋等で頻繁に見られるが、もともとは森林性のネズミであり、木の実などを好 んで食べる雑食性で,その巣も樹上の穴に作るということである。しかし行動範囲は かなり広く、草原や砂浜を横切って海岸を動き回ることも十分考えられるとのことで

あり、この遺跡環境において生息していたと考えても不自然ではない。静岡県登呂遺跡のネズミ返しはこのクマネズミに対する物であると言われ、弥生時代以前から日本各地に生息していた点や、歯形そのものの大きさから考えてもこのクマネズミである可能性が最も強いと言えよう。

椎ノ木遺跡人骨の由来を考える上において、現代、少なくとも近世までは季節的に変動はあるにしても(近くの椎ノ木港に飛魚小屋の跡がある)ほとんど無人に近かったと思われるこのあたりの自然環境と当遺跡の成立との関係が当然問題になるのであろうが、上記考察のようにこの人骨に印された歯跡がクマネズミによるものであるならば、森林性の野性種であった可能性と同時に現在みられるような人間との雑居、つまりは当時このあたりに人間が居住していたことを示唆するものであるとも言え、現状ではいずれとも判断し難いが、古代人の生活の一端を伺わせる意味においても非常に興味深い事例である。

なお、図版 \mathbf{M} , \mathbf{E} に示したのはこの椎ノ木人骨右上腕骨に印されたネズミの歯跡、図版 \mathbf{M} , \mathbf{F} は、クマネズミから人工的につくりだした一変種にあたるラットの歯跡を示したものである。

【4】総括

鹿児島県馬毛島椎ノ木遺跡出土の成年男性人骨は下半部を失なっているものの,頭蓋骨等の保存は比較的良く,その形質における特色の一端を窺い得た。即ち,頭蓋骨においては,短頭,広・低顔の傾向が著しく,各示数・角度でみると,それぞれ,過短頭型,広顔型(Kollmann),過広上顔型(Kollmann),低眼窩,過広鼻型,中顎型(全側面角)となり,地理的にも近い広田人骨との強い類似性を示すとともに,九州北部の弥生人骨,とりわけ高顔,長身を特徴とする三津弥生人骨や山口県土井ケ浜人骨との間にはかなりの形態的な隔りを示した。広田人骨との関係については頭蓋骨の形状のみならず,上顎側切歯に風習的抜歯の痕跡が認められる点や,かなりの低身長であるという点においても共通した傾向が見られる。また,女性人骨ではあるが,奄美大島の宇宿貝塚人骨も広田人骨との強い類似性が指摘されており,本人骨の計測値と比較してみてもその短頭,低顔,短身という点においてよく一致していることは,こうした形質がこの時代,この地方におけるかなり一般的な特色であることを示唆するものであろう。一方,現代与論島民や喜界ケ島人骨と比較してみた場合,同じ南島地方と

言ってもかなり距離的な隔りがあることや、あるいはまた、現代北部九州人に対するよりは明らかに近い形質を持っているということは言えるにしても、両者の間にさ程の類似性が認められない点は(現代与論・喜界ケ島両人骨間にはかなりの類似性が認められている)その時代変化を考える上において興味深い。

椎ノ木遺跡人骨の形態的な位置づけの参考資料として便宜的に椎ノ木遺跡人骨を基準にしたPoniatowski の平均型差値を求めてみると表7の様になる。なお、標準偏差 10) 値を用いた。

表7 平均型差值

	平 均 型 差	比較項目数
広 田 弥 生 人 骨	76.7	1 1
吉胡縄文人骨	8 0 . 0	2 1
西北九州弥生人骨	8 3 . 8	1 9
津 雲 縄 文 人 骨 11)	8 7 . 3	2 1
現代与論島人骨	1 0 8 . 3	2 1
土井ヶ浜弥生人骨	1 1 0 . 3	2 1
現代喜界ヶ島人骨	1 1 8 . 6	2 1
現代西南日本人骨12)	1 3 1 . 3	2 1

わずか一体の人骨に統計的処理をほどこすことにはもともと無理があり、本法自体の持つ問題性からもここで得られた値が各人骨群間の形態的距離を正確に反映したものとは言い難いが、前述してきたような本人骨の広田人骨との強い類似性、及びその広・低顔傾向において西北九州弥生人や吉胡貝塚縄文人骨等と幾分近い関係にある点、さらにはまた高径が大きいということにその相違点が代表される土井ケ浜弥生人骨や現代人骨との大きな形態的隔りはある程度この数値の上からも確認できよう。

こうした南九州と北部九州弥生人の間の地方差は既に金関らにより指摘され、)時代 や地域を異にする各人骨群間の形態的関係や考古学的証左から、南北九州の地方差は 少なくとも縄文晩期頃からある程度存在し、弥生文化と共に長身、高顔の新しい種族

呂遺 日本 ある

的にった ろ

ならつま

見状常に

亦, 亦を

頭骨過側の

この代のある

完島

比較

, の .

1,と

が朝鮮半島から渡来して土井ケ浜や三津に見られる形質を生み出し、ひいてはその影響の及ばなかった南九州人との間により大きな形質差を作りだしたのでは、との考察 1),13) がなされている。また、内藤によって示された西北九州弥生人の低顔傾向、及び津雲 11) 縄文人骨との類似性は、こうした北部九州を基点にする形態的な勾配の存在を示唆、確認したものとも言えよう。

言うまでもなく弥生人の地方差を明らかにしていくことは日本人の成立を考えていく上において重要な課題であり、特に南九州や南島地方と周辺地域との関係はこれまでも興味ある問題点として多くの考察がなされてきた。しかし現在までのところ、そうした考察の資料として利用し得るこの地方の弥生人骨はごく限られており、北部九州弥生人と較べるとその地域変異や時代変化について統計的に有意の議論をするにはまだまだ不十分である。本人骨はわずかに一体、それも限られた部分のデータではあるが、数少ないこの地方の弥生人骨の特色を追加確認させた意味において貴重な資料となるものである。

(中橋孝博, 永井昌文)

(文献)

- 1) 金関丈夫 「弥生時代人」日本の考古学Ⅲ 河出書房新社 1966
- 2) 松下孝幸 「宇宿貝塚出土の人骨」鹿児島県笠利町文化財調査報告書一宇宿貝 塚- 1979
- 3) 金関丈夫・永井昌文・佐野一 「山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式 時代人頭骨について」 人類学研究 vol.7 1960
- 4) 内藤芳篤 「西北九州出土の弥生時代人骨」人類誌 vol.79 1971
- 5) 大山秀高 「鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究」人類学研究 vol.3 1956
- 6) 広沢正彦 「奄美郡島与論島住民上肢骨の人類学的研究」 vol.6 1959
- 7) 大場秀夫 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」第4部,上肢骨の研究」人類誌 vol.50 1935
- 8) 牛島陽一 「佐賀県背振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究」 人

の影 考察 津雲

唆,

てれ, 部

はあ 資料 文)

には

官貝

生式

956

忐

人

類学研究 vol.1 1954

- 9) 中野哲太郎 「鹿児島県大島郡喜界ケ島島民頭骨の研究」人類学研究 vol.5 1958
- 10) 今村豊・島五郎 「東部アジア諸種族の相互関係」 人類誌 vol.50 1935
- 11) 清野謙次・宮本博人 「津雲貝塚人の頭骨の人類学的研究」人類誌 vol.40 1925
- 12) 原田忠昭 「西南日本人頭骨の人類学的研究」 人類学研究 vol.1 1954
- 13) 金関丈夫 「弥生式時代の日本人」 第15回日本医学会総会学術集会記録 1959
- 14) 国分直一・盛園尚孝 種ケ島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報 1958

調査前の視察の段階では、①時代はいつ頃か、②人骨がどの程度原位置に遺存しているか、そしてその形質的な特色はどうか、③葬制はどうか、特に、セメトリを形成しているかどうか、④若し形成しているなら、馬毛島の特殊な環境と集落の成立をどのように結びつけるか、⑤若し単独の埋葬なら、それが現在の西海岸の荒蕪の景観とどう関連するか、⑥他の遺跡の分布状況はどうか、などの点が気がかりであった。

①については、視察の際に指頭ほどの土器片数箇を得て、おおよそ弥生後期相当と の所見を得てはいたが、調査によってそれが上能野式の範疇に入るものであることが 明確になり、遺跡の時代を確定することができた。

②の人骨の遺存状況では、体軀の多くの骨が移動乃至紛失していたにもかかわらず計測上の価値の高い頭骨が原位置にあって調査の一応の成果が保障された。その形質は、計測可能であった部分の数値でみる限り、種子島の広田人骨、大島の宇宿人骨に強く類似し、北九州方面の弥生人骨とは似ていないとのことである。この地方のこの時代における同一形質の人のひろがりについて示唆を得たことは非常な幸であった。抜歯の痕跡があることやツノガイ製品と貝製の小玉を多量に身につける習俗についても同似のことが云えるからである。なお、同じ潮流に洗われた天草沖ノ原人骨(昭和44年出土、縄文後期か――)もこれらと類似点が多いように見受けられる。さらに詳細な数値の発表も真近いと聞いている。比較してみたいものである。

③の葬制については、「崖下」の「砂丘」に掘られたやや不整な「城」の中に頭を略「南に向け」て「仰臥」して埋葬してあった。肘関節を曲げてあったことが判明し仮りに屈葬であったとしてもあまり強く屈折されたものではなかったろうと推定された。目下南島の葬制についてはまだ通観できるほどの資料数がなく、「」の諸条件について議論を展開することは尚早であるが、いずれを採っても他の例に対して特異と云うべき点は見当らない。なお、出土した数箇の小児頭大の礫が城に付属するものか、あるいは人骨に付属するものか必ずしも分明でないが、原位置に残った一箇が広縁を離れて頭側にあり、他のものも胸・腹部の崩落部位にあったので、後者の可能性の方が強かろう。次にセメトリについて云えば、この人骨は一体だけ埋葬されたものか若しくはセメトリの縁辺以遠に葬られたものかのいずれかである。筆者の心証を述べるとすれば、発掘区の様相と付近の地形から推して、前者の可能性の方が強い。

②と⑤は、この島の東半の鬱々とした景観と西半分の荒涼を極めた景観とのすさまじいコントラストに驚き、西半の様相はこの地方の冬期に荒れ狂う西北季節風の所為であって、遺跡形成の頃からこのようにあったものと速断し、且つ、埋葬が一体だけであろうと予察したために抱いた懸念である。つまり、定住地は東にあり、何か異常な理由のために西に隔離して葬られたか、若しくは他島からの季節的な廻遊などの途中にここで死んだものか――、などと考えたわけである。しかし調査の結果では島の西半の景観は近代の人為によるものであって、もともと土壌が浅いために東側ほどではなかったにしても、以前はマテバシイなどの密林もあり、水源にも事欠かず、小人口の定住に耐えうるものであったことが推定された。このことは人骨に残されたネズミの歯形がクマネズミのそれであることと強く符合している。それにしても③の所見に述べたような単独の埋葬であろうとする心証が若し当っているものなら、前述したその死に方や本人のパーソナリテイについての疑問が残るが、今後の調査の進展につれて単独の埋葬が実は一般的であったことになるのかも知れず、現段階での臆測にはあまり意味がない。ただ、埋葬地点に散乱する食滓の様子は、埋葬と現世の生活との背反の度合がそれほど強くはなかったことを示している。

形成

をど

観と

当と

レが

うず

骨に

20

17

和

詳

頁を

1

s n

を件

异

 \mathcal{O}

が拡

と性

0

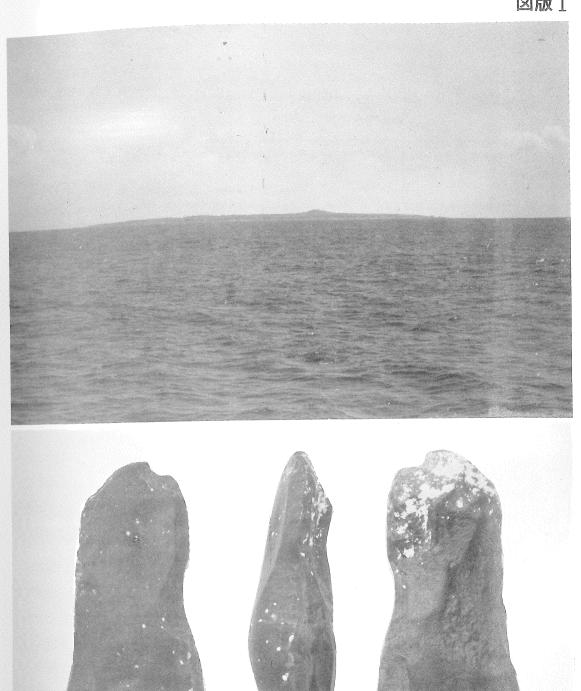
述

人骨の筋の発達の様相が上半身の激しい運動を必要とする生活を想起させる点は甚だ興味深い。これが若し漁撈に起因するものであるなら、それは礁原を対象とするすなどりの域を脱し、舟を日常に操る沖合の漁撈を営んでいたのであろう。しかし沖合の魚群,鹿の群棲、マテバシイ、その他の植物性食糧、礁原の魚貝等、生活資源とその活用の技術についての追求は、遺跡の性格と調査の規模に合いにくく、当初から半ば断念の状況であった。また、⑥の分布調査については、途中台風の襲来に逢って日程と食糧を失ない、充分にこれを行なうことができなかった。

最後になったが、貝の同定では奈良崎和典氏、貝の小玉に関しては九州大学理学部 吉田俊秀氏、水晶に関しては同渡辺隆氏、武内浩一氏、ネズミについて同農学部白石 哲助数授、同理学部江口和洋氏、島の景観の理解について熊本大学教養部山口守人教 授、同今江正知助教授から御教示や御指導をいただいた。また、九州大学医学部永井 昌文教授は自ら人骨計測と報文執筆の指揮をおとり下さった。あつく御礼を申しあげ たい。

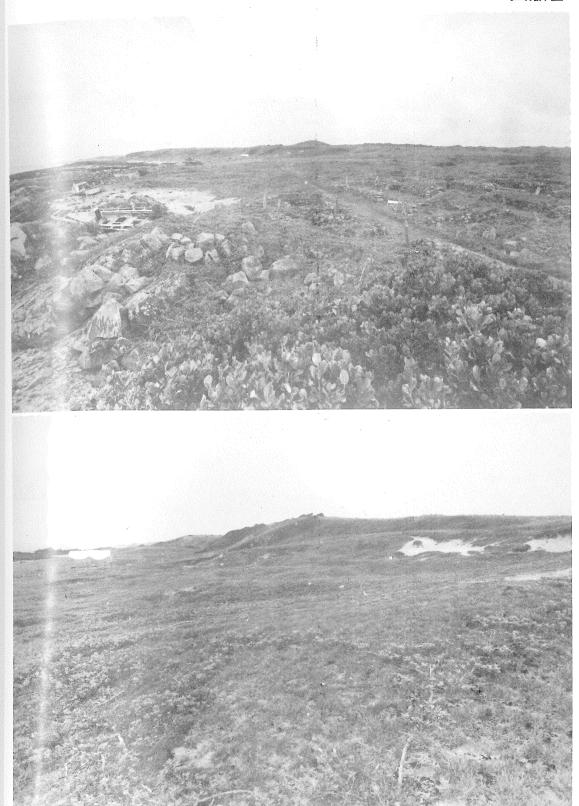
(白木原和美)

図版Ⅰ

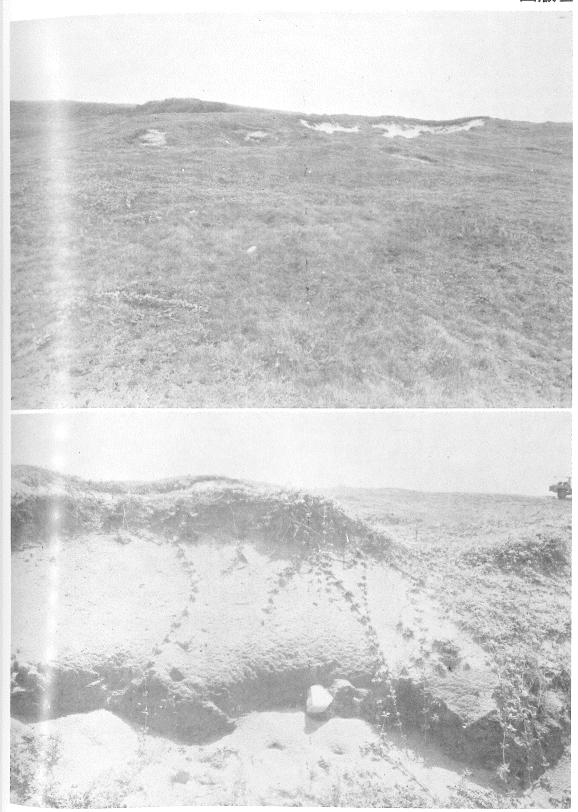


上 馬毛島遠景(東北より) 下 馬毛島No.1 地点採集石斧

図版Ⅱ

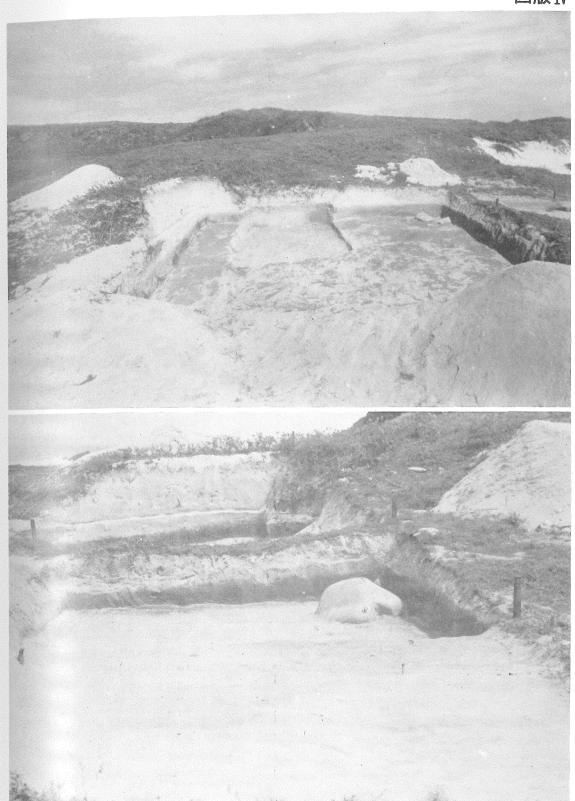


上 椎ノ木遺跡遠景(南西より) 下 椎ノ木遺跡全景(南西より)



上 椎ノ木遺跡全景(西より) 下 発掘前の状況

図版IV



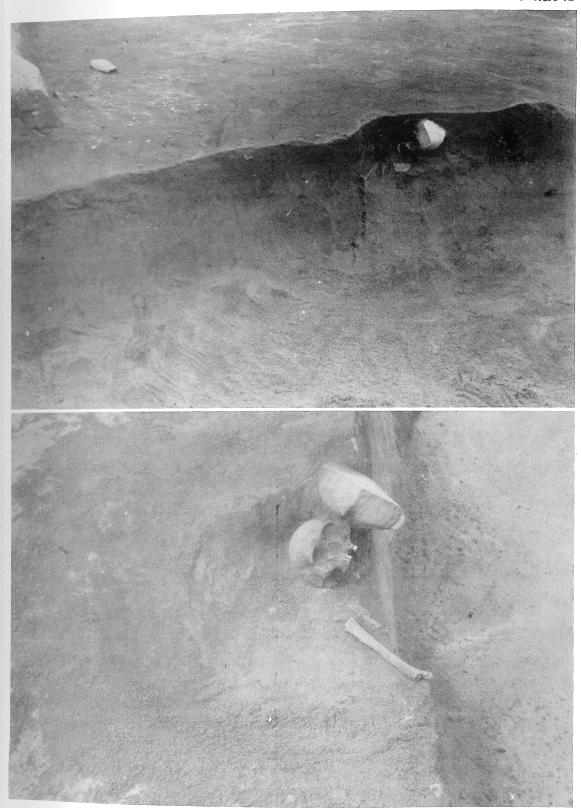
上 発掘後の状況(西より) 下 発掘後の状況(南より)

図版Ⅴ



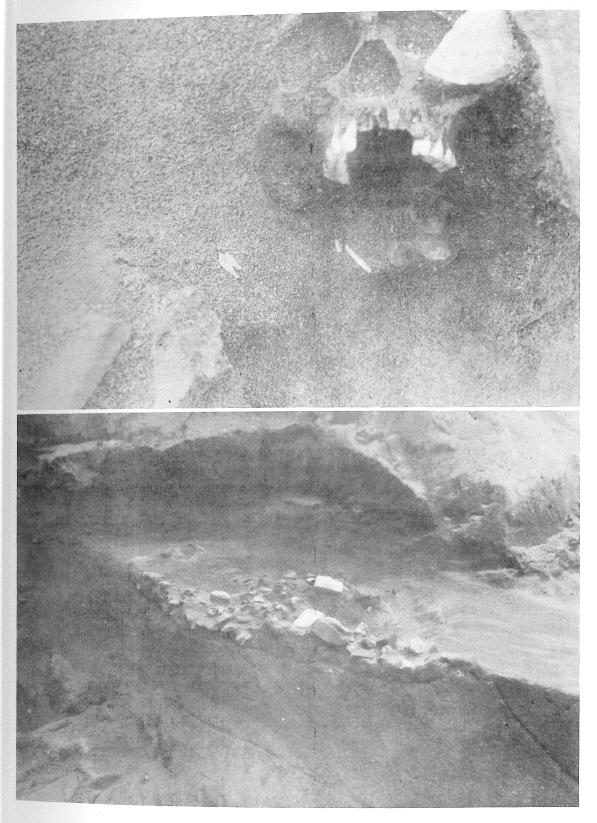
上 人骨の出土状況

下 人骨の埋葬状況

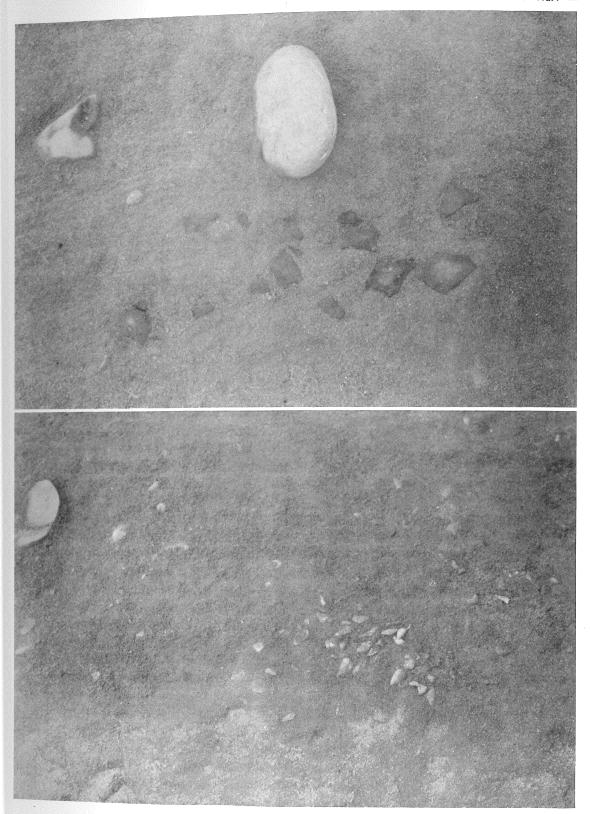


上 土城の平・断面の状況 下 土城内の状況

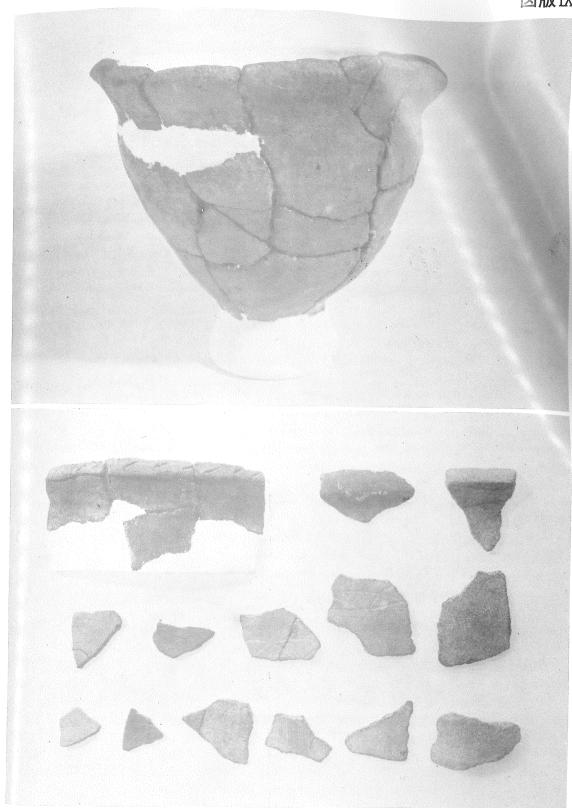
図版Ⅷ



上 水晶の出土状態 下 第V層のレンズ状球層

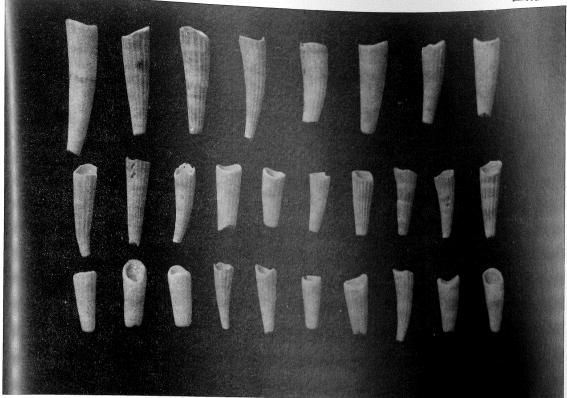


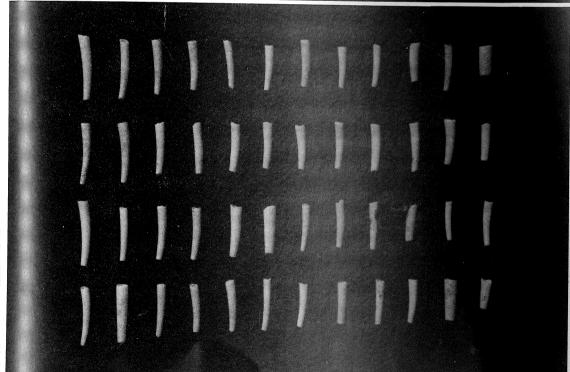
上 3-Dグリッド第Ⅲ層土器出土状況 下 3-Bグリッド第Ⅲ層貝穀出土状況



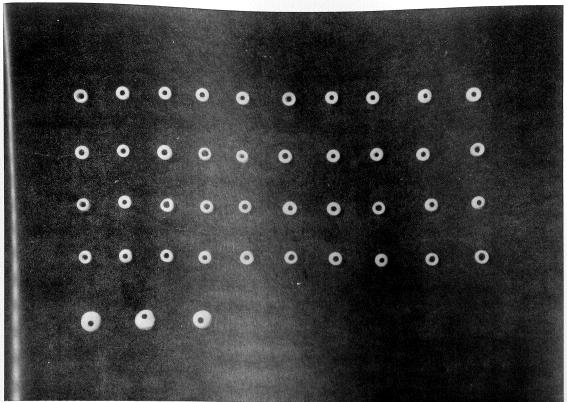
上 第Ⅲ層出土土器 下 第Ⅲ層出土土器

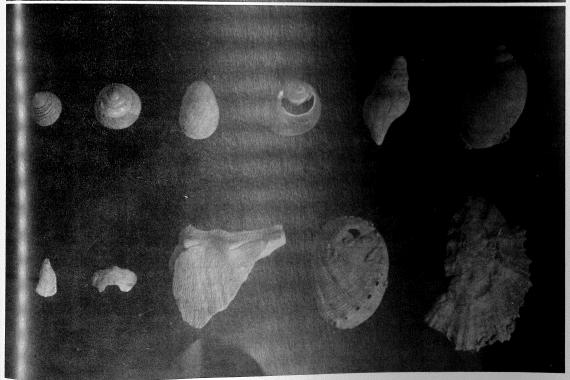
図版X



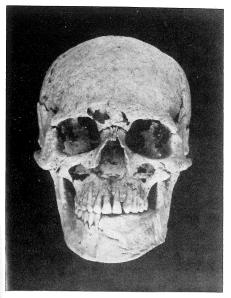


上・下 出土したツノガイ

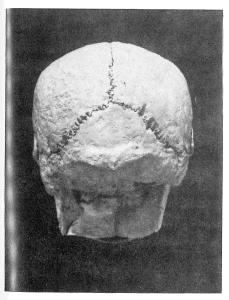




上 貝小玉 下 第Ⅲ層出土の自然遺物



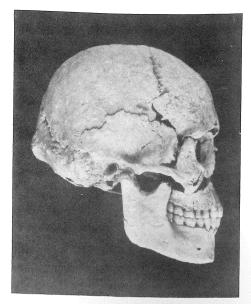
(A) 正 面 観



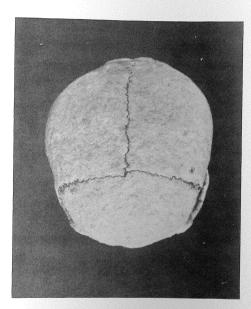
(C) 後 面 観



(E) 右上腕骨に見られるネズミの歯跡



(B) 右 側 面 観



(D) 上 面 観



(F) 実験室ラットの歯跡

馬毛島埋葬址

鹿児島県西之表市馬毛島椎ノ木遺跡

昭和55年7月1日

編集 西之表市教育委員会

〒891-31鹿児島県西之表市西之表7612

電 話 (09972) — ② - 1111

印刷 印刷工房 もっぷる舎